

平成21年 4月 30日現在

研究種目：基盤研究 (B)  
研究期間：2006 ～ 2009  
課題番号：18330186  
研究課題名 (和文) 中・高生の幼児とのふれ合い体験学習についての実践構造の再検討  
研究課題名 (英文) Reexamination of junior and senior high school students' experience in early childhood education and care

研究代表者 岡野 雅子 (OKANO MASAKO)  
信州大学・教育学部・教授  
研究者番号：10185457

研究分野：家庭科教育学  
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学  
キーワード：ふれ合い体験学習，中学生・高校生，幼児，幼稚園・保育所，家庭科，かかわり，発達を学ぶ，ガイドブック

#### 1. 研究計画の概要

(1) 家庭科は、戦後の学校教育において保育教育を担ってきた実績を有しているが、昨今の子どもが育つ環境を考えると、なお様々な課題が存在しているといえる。昨年3月に告示された新『中学校 学習指導要領』では、保育領域の一層の充実が図られた。近年では「保育体験学習」を実施している中学校・高等学校は急増しているが、その実情は送り出す(中学・高校)側も、受け入れる(幼稚園・保育所)側も様々であり、教育プログラムは十分に系統立っているとは言い難い。そこで、家庭科の「保育体験学習」の実態を把握し、課題を整理し明確化する。

(2) 「幼児とのふれ合い体験」は、家庭科のみならず、総合的学習の中の職場体験学習(キャリア学習)やボランティア活動などさまざまな位置づけのもとに行われている。しかし、家庭科は保育に関する知識・技術を中学・高校と一貫して教える役割を果たしてきたことから、家庭科が基軸となって「幼児とのふれ合い体験学習」を主導していくべきであると考え。本研究は、そのための優れたカリキュラムの開発に向けて考察を行う。

(3) 「幼児とのふれ合い体験学習」を通じて生徒に何が育つのかについて、人間発達の見通しの獲得や子どもに対する行動・態度・感情の変容などについて実証的に検証して明確化する。それらに基づき、総合的に考察を行い、優れたカリキュラムの開発を目指す。

#### 2. 研究の進捗状況

(1) 中・高生にとって「幼児とのふれ合い体験学習」による効果として、乳幼児に対する肯定的な感情やイメージをもったり、自分の成長を振り返ったり、親に対して感謝の気持ちをもつようになるなど、その効果は乳幼児理解にとどまらず自己の成長とも密接に関連していることは既に先行研究により示唆されている。しかし、「幼児とのふれ合い体験学習」を受け入れる側(幼稚園・保育所)はそれをどのように位置づけ、捉えているのだろうか。そこで、幼稚園・保育所を対象に質問紙調査および面接法により資料を収集して受け入れ側にとっての意義について尋ねた。その結果、保護者の不適切な子どものかかわりが増加していると実感している保育現場としては、近い将来に親となる世代で

ある中・高生が幼児とふれ合う体験の場を提供することにより、幼児理解を促して「将来の親」に対する「子育て支援」となると捉えていることがうかがえた。

(2) 「中・高生の幼児とのふれ合い体験学習」にあたっては、中・高生のみならず幼児にとっても教育効果のある「ふれ合い」の実現が望まれることから、生徒を送り出す側（中学・高校の教員）と受け入れる側（幼稚園・保育所の保育者）の相互理解を深める必要があると考えた。そこで、『保育体験学習ガイドブック』を作成した。作成には、中学・高校の家庭科教員 4 名と幼稚園・保育所の保育者 3 名の計 7 名の専門的意見を聴取し参考にした。なお、平成 21 年 5 月に開催される日本保育学会第 62 回大会においてシンポジウムを開催し、参会者に配布する予定である。

(3) 『「幼児とのふれ合い体験学習」を通して育つもの』について、中・高・大学生を対象に調査を実施した。その結果、幼児についての知識は中・高・大学生と発達に伴って上昇していること、および知識と幼児に対する肯定的感情は関連が深いことが明らかとなった。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

現在、学会誌に投稿中の論文 1 本、学会誌に投稿すべく準備中の論文 1 本のほかに、学会誌に投稿を予定して結果の集計・考察を行っているものがある。

また、資料収集を行う中で、「中・高生の幼児とのふれ合い体験学習」のより一層の充実を図るためには、中・高の教員と幼稚園・保育所の保育者の相互理解を深めることが重要であるとの認識に至り、当初の計画にはなかったが、『保育体験学習ガイドブック』（全 24 頁）を作成した。

### 4. 今後の研究の推進方策

現在準備中の論文を作成して、学会誌に 2 本を投稿する。さらに、論文 1 本を作成して学会誌に投稿する予定である。また、研究代

表者および研究分担者 2 名が得られた資料の中からそれぞれの視点のもとに各論的に取り上げて論文を作成し、勤務校の紀要等に掲載する予定である。

### 5. 代表的な研究成果

[学会発表] (計 5 件)

① Masako Okano, Yoko Ito, Kiyomi Kuramochi, Toshiko Kaneda. Indication of young people's interaction with infants in Japan; Comparison of understanding between childcare workers and teachers. 21<sup>th</sup> IFHE(International Federation for Home Economics)World Congress 2008. 2008.7.29. Luzern, Switzerland.

② Masako Okano, Yoko Ito, Kiyomi Kuramochi, Toshiko Kaneda. Caring Education in Home Economics in Japan. 14<sup>th</sup> Biennial International Congress of ARAHE(Asian Regional Association for Home Economics). 2007.8.8. Petaling Jaya, Malaysia.

③ Yoko Ito, Masako Okano, Kiyomi Kuramochi, Toshiko Kaneda. Caring Education in Contact Experience between Teens and Children. 25<sup>th</sup> World Congress of OMEP. 2007.7.18. Mexico City.

④ 倉持清美・伊藤葉子・岡野雅子・金田利子. 幼児とのふれ合い体験に関する幼稚園・保育所側の意識. 日本家庭科教育学会第50回大会. 2007.6.30. 東京・代々木.

⑤ 岡野雅子・伊藤葉子・倉持清美. 中・高生のふれ合い体験学習の意義—幼児の側の視点から—. 日本保育学会第60回大会 (自主シンポジウム). 2007.5.20. 埼玉・新座市.